



2024年度（令和6年度）

第2回「不登校を考える学習会」を開催しました。

2024.10.4(金)

小郡市 生涯学習センター セタホール

演題：「子どもに寄り添うということ ～発達障害のある子どもに学ぶ～」

2024年度 第2回の「不登校を考える学習会」を10月4日（金）小郡市生涯学習センター セタホール において開催しました。今回の講師には、西九州大学 子ども学部 子ども学科 特任教授 日野 久美子（ひの くみこ）さんをお招きしました。

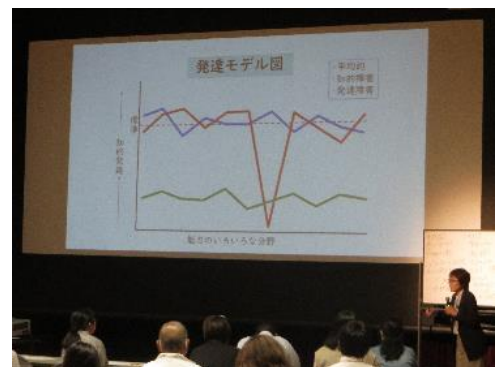
日野さんは、佐賀県内での小学校教諭をスタートに、LD・ADHD等 通級指導教室の担当教員を務められました。その後、佐賀大学教職大学院や現職において、特別支援教育を専門に教員養成や研究に関わってこられました。他にも、発達障害をはじめとする子どもの理解や指導・支援について、園や各種学校の巡回相談、教育・福祉・行政などが主催する各種研修などに携わっていらっしゃいます。現在も特別支援教育を中心に様々な活動をサポートし続けておられ、子どもの思いに寄り添い、困り感のある児童生徒や保護者に関わっていらっしゃいます。

今回の学習会では、「子どもに寄り添うということ ～発達障害のある子どもに学ぶ～」をテーマに、これまで日野さんがご経験された多くの体験を基にお話ししていただきました。能力に大きなアンバランスさがあるという発達障害の特性から、自分に自信を失い一歩を踏み出せなくなる子どもをどう理解し、どのように関わっていくのか、「寄り添う」とはどういうことなのかについて、参加者の皆さんと一緒に考えていきました。また、今回の学習会には47名の方にご参加いただきました。ご参加いただき本当にありがとうございました。学習会の内容について ご紹介いたします。



○ ゴールは「社会で自立すること」

まず、日野先生より子どもを支える学校や家庭、地域、社会の現状についてお話しがありました。発達障害の特性や「できること」、努力だけでは「できにくいこと」、そして自立した大人として社会活動に参加・適応できる大人になれることがゴールであることなど、それぞれの役割やちがいについてわかりやすく教えていただきました。続いて、発達モデル図を基に、知的発達と能力のいろいろな分野における偏りについて説明していただきました。極端なアンバランスによって、生活していくうえで、時々「困ること」が発生してしまい、その連続によって自分への負のメッセージがわき起こり、そのことを原因として対人関係のとりにくさやコミュニケーション能力の低さにつながるという負のサイクルについて、不登校との関連と併せてお話ししていただきました。



○ 「困り感」を体験してみると…

続いて、実際に困っている子どもの感情を追体験するため、会場を教室に見立てての演習がありました。スライドに描かれたイラストを基に「何が見えますか?」「見えた人は手を挙げて教えてください。」「わからない人はがんばってみましょう。」…などなど。元小学校教諭の日野さんの軽快な語り口と児童生徒役になった参加者の皆さんとのやり取りに、あっという間に時間が進んでいきました。参加者からは、「わからない自分がすごく不安になりました。」「わからないことで、周りから取り残されたような気持ちになりました。」「頑張っ！じゃなくて、もっと違う支援をしてほしかったです。」「わからないことが続くと、やる気もなくなっていました…。」などの感想が出されました。体験を通して、「困り感」を感じている子どもの気持ちに寄り添うきっかけとなりました。



○ 「ほめ方のポイント」とは…?

学習会の後半では、「ほめ方のポイント」についてのお話がありました。子どもをほめるタイミングや具体的な声かけについて、親の考え方や価値観を押し付けることなく、特性による困難の背景をつかむ必要性やサポートする方法についてわかりやすく説明していただきました。「プロセスをほめること」「その子のペースを大切にすること」「気持ちに共感すること」という言葉が印象的でした。



参加者アンケートより

- 「わかったっ!」と思う体験をできたのがよかったです。わからない時の子どもの気持ちがよくわかりました。ほめ方の具体的な言葉かけが勉強になりました。
- 発達障害の子どもに対しての接し方が学べて良かったです。子どもがASDとADHDの診断を受けて、私だけがかかえこんでいました。これから、子どもへの接し方を変えてみようと思います。
- 初めての参加で迷っていましたが、参加して良かったです。「その子のペースを大切にすること」「気持ちに共感すること」心にとめて子どもたちと関わりたいと思います。
- できていないことばかりに目がいってしまいがちだったが、ほめることの重要性を感じました。最後の「ほめ方のポイント」は勉強になりました。
- 演習がとても良かったです。自分が体験しないとその人の気持ちがわからないし、その時の気持ちを言葉で考えなおして他の人の意見も聞くこともできてよかったです。
- 学校、家庭は間違ふことや失敗を学ぶことを大事にしていきたいです。
- 当事者である子どもの気持ちについて、演習を通して私事として感じられたことがよかったです。ひいては「寄り添う」という言葉の意味を改めて体験を通して学べたことがとてもありがたかったです。
- 具体的に話をしていただいたので子どもたちの顔が浮かびました。時間が少なかったのもっと聞きたいと思いました。成功体験をたくさんできるように、声かけや支援について、これから考えていきたいと思っています。

